

# 「すべてはキリスト」

1<sup>st</sup> 「セレブレイト・マツォート」(2023/4/9~16)における

## 神の導きの振り返り

### ベレーシート

●4月9日の日曜日の夜から始まったアシュレークラス主催の「第一回 セレブレイト・マツォート」(種なしパンの祭り)は、七日間、夜と朝に集會がもたれ、今朝の礼拝で終了します。初めてのこの「マツォート」の祭りは、昨年10月の「スッコート」と12月の「ハヌッカー」の祭りから続く一連の祭りです。どんな祭りになるのか、最初から分かっていたわけではありません。行って見て、これまで学んできたことの総括となる祭りだったことに気づかされました。そのことを話してみたいと思います。

●「セレブレイト」という言葉は英語です。これは「祭り」という意味で使っていますが、その本質は「神への礼拝」です。今回の「セレブレイト・マツォート」の最後の集會において、私は予定して取り上げることができなかった詩篇118篇からお話しするつもりで準備していました。ところが、今朝五時に起きて最後の準備をしていた段階で、それを変更するようにと導かれました。

●「種なしパン」(「マツォート」**תוצות**)が、聖書で初めて言及されているのは創世記19章であることが、昨日の集會(神田師)で語られました。

【新改訳2017】創世記19章3節

しかし、ロトがしきりに勧めたので、彼らは彼のところに立ち寄り、家の中に入った。ロトは種なしパンを焼き、彼らのためにごちそうを作った。こうして彼らは食事をした。

●アブラハムの甥ロトのところに訪れた二人の御使いのために、ロトが「種なしパン」を焼いてごちそうしました。彼は異邦人です。この箇所から、異邦人の教会に対する「携挙の啓示」と、それに伴う神の励ましのメッセージが語られました。教会にとって最大の祝福の望みは、「携挙」の他にはありません。これがなければ、神のご計画の重要なピースは失われてしまいます。神のご計画はあくまでもイスラエルを基軸として進められ成就しますが、同時に異邦人も彼らに接ぎ木される形で祝福を受けます。しかし、イエシュアが「ぶどう園の労働者のたとえ」を通して語られた「後の者が先になり、先の者が後になる」(マタイ20:16)と言われた真理は、「マツォート」(**תוצות**)という語彙が聖書で使われる順序にも表されていることを知らされました。ちなみに、「後の者」とは教会のことであり、「先の者」とはイスラエルのことです。

## 1. 「マツオート」(種なしパン)が意味すること

●一方イスラエルに対する「マツオート」の話が、出エジプト記 12 章に出てきます。神がイスラエルの民に対して、それを食べるようにと命じています。

【新改訳 2017】出エジプト記 12 章 8 節

そして、その夜、その肉を食べる。それを火で焼いて、**種なしパン**と苦菜を添えて食べなければならない。

●イスラエルの建国となる過越の出来事と深く関係するものとして「種なしパン」が登場しています。神はイスラエルに対して過越の祭りを毎年することを命じ、その祭りに付随して、七日間の「種なしパンの祭り」をすることを命じています。

【新改訳 2017】出エジプト記 12 章 15 節

**七日間、種なしパンを食べなければならない。**その最初の日に、あなたがたの家からパン種を取り除かなければならない。最初の日から**七日目**までの間に、種入りのパンを食べる者は、みなイスラエルから断ち切られるからである。

【新改訳 2017】出エジプト記 13 章 7 節

七日間、種なしパンを食べなさい。あなたのところに、**種入りのパンがあってはならない。**あなたの土地のどこにおいても、あなたのところに**パン種があってはならない。**

●幕屋で仕える祭司たちの任職の際には、「種なしパン」を神に献げるように命じられており、しかもそれらを「**最良の小麦粉**」で作ることが命じられています。

【新改訳 2017】出エジプト記 29 章 2 節

また、**種なしパン**、油を混ぜた種なしの輪形パン、油を塗った種なしの薄焼きパンを取れ。これらは**最良の小麦粉で作る。**

●この箇所は祭司たちに対する教えですが、私たち主を信じる者たちはみな祭司となります。信徒や平信徒ということばは聖書にはありません。すべての者が祭司の務めをするようになるのが神のみこころです。祭司とは神の前に多くの時間を過ごし、神の声に注意深く耳を傾け、そのみこころを聞く者のことです。ベタニアのマリアはそうした祭司の型なのです。目に見える立派な装束を着ていなくても、目に見えないキリストの衣を着せられているからです。

●祭司たちが任命を受ける時、「種なしパン」を最良の小麦粉で作るように神は語っています。今回の「マツオート賛美」の最後に、「岩にできる蜜と**最良の小麦を与えよう**」という賛美がありました。また、「小麦と大麦」が何を意味するかを今回学びました。その二つはいずれもキリストのことを表しています。イエシュアが「まこと

に、まことに、あなたがたに言います。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままです。しかし、死ぬなら、豊かな実を結びます」(ヨハネ 12:24)と言った「麦」とは「小麦」のことです。そして「小麦」は「キリストの死」の象徴であることを学びました。ちなみに、「大麦」は「キリストの復活」の象徴です。

●ところで、イスラエルの民は過越の出来事によって、エジプトの奴隷から神の民へと成立します。そのための「種なしパン」は、この世を象徴するエジプトとは完全に異なる「聖なる民」となるための神のことばを意味する大切なものです。それはクリスチャンにとっても同様です。パウロがコリントの教会への手紙の中で、「種なしパン」について言及しています。コリント教会はとりわけこの世の価値観が強く入り込んだ教会であり、次のように語られています。

【新改訳 2017】 I コリント人への手紙 5 章 6~8 節

6・・・わずかなパン種が、こねた粉全体をふくらませることを、あなたがたは知らないのですか。

7 新しいこねた粉のままでいられるように、古いパン種をすっかり取り除きなさい。あなたがたは種なしパンなので、私たちが過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです。

8 ですから、古いパン種を用いたり、悪意と邪悪のパン種を用いたりしないで、誠実と真実の種なしパンで祭りをしようではありませんか。

●パウロはヘブル人です。イスラエルにおいて神が定めた祭り(礼拝)の精神を、異邦人教会に対して語っています。「パン種」というこの世の価値観、悪霊たちが蒔く「種」であるストイケイア(στοιχειά)を、神が選んで呼び集められたエックレーシアに持ち込んでほしくないことを語っているのです。

## 2. 「イエシュアがキリストである」とはどういうことか

●今回のヘブル・ミドウラーシュの一つ、「ハッマーシーアツハ」(逆瀬川姉による)で提起された「キリストってなあに」も、今回の重要な神の導きでした。これはアシュレークラスがこの一年間、力を注いで学んできた内容だからです。冠詞付きのキリスト、つまり「ハッマーシーアツハ」(ἡ ἰησοῦς)の意味は、**最も卓越した聖なる油注がれた者**であり、その油注ぎを私たちに与えてくださる方であるということ、改めて確認する時となりました。イエシュアがなぜキリスト「ハッマーシーアツハ」なのか、なぜイエシュアが聖なる注ぎの油を与える者となられたのかを知る、最高の機会を神は与えてくださいました。

●イエシュアは受肉して人となって歩んだ 33 年半の間、完全に神のみこころに従った歩みをなされたこと、御父の前に全き謙遜をもって、しかも十字架の死にまで従われたことによって、最初のアダムの罪とそののろいを終わらせてくださいました。このことをパウロは「私たちが過越の子羊キリストは、すでに屠られたのです」と言っています。すばらしい恵みです。イエシュアの流された十字架の血潮によって私たちのけがれはきよめられ、すべての罪も赦されて、神に近づく者とされたのです。しかし、それは神の新しい創造の半分でしかありません。それだけでは、私たちが神の子として生きることはできません。神の子どもとして生きるためには、イエシュアが三日

目に死人のうちからよみがえり、「いのちを与える御霊」( I コリント 15:45)となって、私たちの霊の中に御霊として内住してくださなければならなかったのです。このことが「聖なる注ぎの油(出 30:22~31)を与える」ことでもあるのです。これは神が人に対してなされた神の包括的な出来事でした。このことによって、私たちの神を知る霊が回復したのです。それ以前のことを少し語りましょう。

●私たち人間は「**霊とたましいとからだ**」で造られています( I テサロニケ 5:23)。最初の人アダムがサタンの言うことばを信じたことは、サタンのことばを食べたことと同義です。人は「食べた」ものと一つになるのです。神のことばを食べるならば神と一つになるのですが、反対にサタンのことばを食べるならサタンと一つになるのです。本来、人はエデンの園にあるすべての木を食べて生きるようにされました。「木」とは神のことばを表します。しかし、神はアダムに警告していました。すべての木の中の一部である「**善悪の知識の木**」だけから食べると、必ず死ぬと。「善悪の知識の木」とは何なのでしょう。これは預言的なことばです。預言的とは、イエシュアが来ないと分からないということです。つまりイエシュアが来られた時に、その意味がはじめて明かされるのです。「善悪の知識の木」とはモーセの律法のことです。イエシュアの時代、ユダヤ教の宗教指導者たちは律法を間違っ  
て解釈し、律法主義を招いて、「いのちの木」のない教え(=罪と死の律法)、つまり「死」を人々にもたらしていました。そして彼ら自身も、また多くの人々も、いのちの木であるイエシュアのことばを拒絶したのです。それは今日のユダヤ教だけでなく、教会や私たち一人ひとりのたましいの部分でも続いています。最初のアダムに対する神の警告が、そのことばの通りに実現しているのです。

●創世記にはそうした預言的なことばが多く語られています。創世記 2 章 24 節の「男は父と母を離れ、その妻と結ばれ、ふたりは一体となるのである」ということばも同様です。ここの「父と母」とは一体何でしょう。最初の人に妻が与えられた箇所です。はじめから大人として造られているのに、なぜ「父と母」が語られているのでしょうか。その「父と母」とは、イエシュアの時代のユダヤ教の宗教指導者たちのことを指しているのです。「父」とは神殿を中心とするユダヤ教、「母」とは律法主義者たちのことです。神殿の「ヘーハール」(הֵיחָל)は男性形、律法の「トーラー」(תּוֹרָה)、あるいはみことばを意味する「イムラー」(אִמְרָה)は女性形です。これらのくびきこそ、「父と母」に隠された奥義です。もちろんパウロが言うように、「男とその妻」とは「キリストと教会」のことです(エペソ 5:31~32)。キリストは神殿ユダヤ教と律法主義という「父と母」を捨てて、教会と一体となってくださったのです。その預言が創世記 2 章 24 節のことばなのです。

●話を戻したいと思います。最後のアダムであるイエシュアが死からよみがえり、「いのちを与える御霊」となされたことで、何が起こったのかと言えば、復活のその日にイエシュアは、ご自身のからだを初穂のささげ物として御父に献げるために「**秘密の昇天**」をされました。そしてその日の夕方に地上の弟子たちのところを訪ね、「息を吹きかけ」て「**聖霊を受けよ**」と語ります。弟子たちが聖霊を受けた(=いのちを与える御霊が内住した)ことで、人の霊と神の霊がミングリング(調合)されたのです。ですから、この時から人は神の子どもとして、神のことを「アバ・父」と呼ぶようになったのです。

【新改訳 2017】ローマ人への手紙 8 章 15~16 節

15 あなたがたは、人を再び恐怖に陥れる、奴隷の霊を受けたのではなく、子とする御霊を受けたのです。

この御霊によって、私たちは「アバ、父」と叫びます。

## 16 御霊ご自身が、私たちの霊とともに、私たちが神の子どもであることを証ししてください。

●太字の部分がとても重要なのです。「私たちが神の子どもであることを証しする」のは、人の霊と神の霊である御霊の共同の働きなのです。多くの人が人の霊について知りません。霊とたましいの区別ができず、神の子として健全な歩みができないのです。なぜなら、たましいはサタンが今なお足場を置いて働いているからです。神が新しい創造をしてくださったのは人の霊の部分です。そこが神の新創造の出発点です。

【新改訳 2017】 Iヨハネの手紙 2章 27節

しかし、あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっているので、だれかに教えてもらう必要はありません。その注ぎの油が、すべてについてあなたがたに教えてくれます。それは真理であって偽りではありませんから、あなたがたは教えられたとおり、御子のうちにとどまりなさい。

●「あなたがたのうちには、御子から受けた注ぎの油がとどまっている」とあるように、この「注ぎの油」がなければ私たちは神とつながり神を知ることができないのですが、この「注ぎの油」を与えることのできる方が唯一イエシュアです。そのイエシュアこそが「注ぎの油」(キリスト)を私たちに与えてくださったゆえに、「イエシュアはキリスト」なのです。そのようなことができるのは神しかいません。ですから、「イエシュアこそキリスト」とは、「イエシュアは神である」という告白であり、それを「イエス・キリスト」ということばで表しているのです。

●幕屋では、大祭司が聖所の香壇で献げる「聖なる香(こう)」を神が甘い香りとして嗅がれ、それゆえに、幕屋に関わるすべての人と器具を聖別する「聖なる注ぎの油」が塗られたのです。その前提として「聖なる香」を神に献げることがなければ、「聖なる注ぎの油」の効力はないのです。このことを実体化させたのが、人として来られたイエシュアです。そのイエシュアの人としての務めは、ご自分を「聖なる香」として完全に神に献げることでした。それゆえに、イエシュアが「いのちを与える御霊」となられたのです。「いのちを与える御霊」、イコール「聖なる注ぎの油」、すなわち、イエシュアこそ「冠詞付きのキリスト」、「ハツマーシーアツハ」(חַטְמוֹתַי) なのです。(空知太栄光キリスト教会 HP「セブレイト・ハヌッカー」の「ハヌッカーの備えと補充」の(5)「香り」を参照)

## 3. 全被造物の「初穂」としての御子イエシュア・ハツマーシーアツハ

●「イエシュアこそキリスト」(イエス・キリスト)という告白は、単に「イエシュアが神である」という教理的な意味ではなく、イエシュアは、サタンによって機能不全を起こしていた人の霊を回復してその中に住み、神を知って生きることを可能にくださった方であるという信仰とその経験を伴う告白なのです。イエシュアをキリスト(聖なる油注ぎをなされる方)として信じるなら、その実体化がなされていくのです。このことが「新創造」であり、神にしか使われないヘブル語の「バーラー」(「創造した」בָּרָא)という語彙なのです。ですから、創世記 1章 1節の「はじめに神が天と地を創造された」という宣言は驚くべき神の宣言なのです。

●1章 1節の冒頭の「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית) (はじめに)ということばは、この一語だけでも、神のご計画

における最も重要なことばです。「ベレーシート」(בְּרֵאשִׁית)の中にある黄色の部分「創造した」を意味する「バーラー」(בָּרָא)と文字の配列が全く同じです。神の世界では偶然ということはありません。「はじめに(神が)・・・を創造した」というヘブル語「ベレーシート・バーラー」は一続きになっているのです。

## בְּרֵאשִׁית בָּרָא אֱלֹהִים אֶת הַשָּׁמַיִם וְאֶת הָאָרֶץ:

●しかも、אבのヘブル文字の一つ一つが御子・御霊・御父のそれぞれの頭文字になっているのです。御子は「バーン」(בֵּן)、あるいは息子を意味する「バル」(בַּר)。御父は「アーヴ」(אב)、そしてそれを結びつけている御霊は「ルーアツハ」(רוּחַ)です。それらの頭文字を合わせると「バーラー」(בָּרָא)となるのです。出来すぎていませんか。ヘブル語は神の言語だからそれができるのです。

●「レーシート」(בְּרֵאשִׁית)は「初穂・最上の物」という意味です。何の「初穂」なのかと言えば、新しい被造物の初穂です。御子は神です。その御子が死と復活を通して「新しい被造物の初穂」となられたのです。その「初穂」である御子イエシュアが「いのちを与える御霊」となられました。それによって、人だけでなく全被造物が新創造されるという話が、聖書全体のストーリーなのです。この**創造のシナリオの本体はすでに天にあります**。時間と空間という歴史を、神はその本体の「写しと影」を用いて展開されるのです。「エデンの園」から始まって「幕屋」「神殿」「教会」「メシア王国」までの全歴史のすべてが、本体の写しなのです。本体がなければ「写しと影」とは言いません。パウロが「最後のアダム」となられたこの**御子**について、次のように語っていることはとても重要です。

【新改訳 2017】コロサイ人への手紙 1 章 13～17 節

13 御父は、私たちが暗闇の力から救い出して、愛する御子のご支配の中に移してくださいました。

14 この御子にあって、私たちは、贖い、すなわち罪の赦しを得ているのです。

15 御子は、見えない神のかたちであり、すべての造られたものより先に生まれた方です。

16 なぜなら、天と地にあるすべてのものは、見えるものも見えないものも、王座であれ主権であれ、支配であれ権威であれ、**御子にあって**造られたからです。万物は**御子によって**造られ、**御子のために**造られました。

17 御子は万物に先立って存在し、**万物は御子にあって成り立っています。**

●このような考え方はこの世にはありません。15 節「御子は、・・・すべての造られたものより先に生まれた方です」とは、御子イエシュアがすべての被造物に先立って「復活の初穂」、つまり「新創造の初穂」となられたということです。さらに言い換えるなら、「最初の被造物」、つまり「最初に新創造された方」御子イエシュアとなります。その初穂である御子によって造られる新しい創造—それが、教会であり、メシア王国です。しかしながら、それも写しです。本体は「すでに存在している」のです。それは「**新しいエルサレム**」です。そこは神と人が「**顔と顔を合わせる**」ことのできる世界です。「聖なる注ぎの油」であるキリストの内住と油注ぎを信じ、祭司としてみます整えられて行くならば、必ずやそのようなすばらしい世界を思い描くことができ、それを待ち望むことができるでしょう。これこそ「**王なる祭司**」の骨頂です。主に選ばれた者たちがそのような祭司となるべく、イエシュアはキリスト(ハツマーシーアツハ)となられたのです。

## ベアハリート

●「すべてはキリスト」というテーマでもたれた第一回目の「セレブレイト・マツオート」は、「イエシュアこそキリスト」、すなわち「イエシュアがハツマーシーアツハ (חַיְשׁוּא הַמְצִיחַ אֶת־יִשְׂרָאֵל)」であること、そのことをまず知るよようにというメッセージを神から受け取りました。多くのクリスチャンは「イエシュアは救い主」と理解してはいますが、「イエシュアがキリスト(メシア)」であることに必ずしも目覚めてはいないように思います。このことを知ることが、第一回の「セレブレイト・マツオート」で神が導かれた事柄でした。私が今年の5月からメッセージしてきた「霊の中に生きる」というその焦点は、まさにこのことだったのだと気づかされました。しかし単に頭で知っただけでは何の意味もありません。そのことを日々経験していく者とならなければなりません。

●「祭りの骨頂」は、打ち上げ花火で終わるのではなく、祭りで示されたいのちの流れが継続的に、さらに未広がりに流れていくことです。ことばに言い表せない神の賜物のゆえに神に感謝いたします。主の導きに御名をあげ、御名の栄光をほめたたえます。

アシュレークラス主催 1<sup>st</sup>「セレブレイト・マツオート」の最後の集会

2023.4.16 銘形 秀則